

巻頭言

「炭酸泉誌第2巻第2号」発刊にあたって

石和温泉病院
若林哲也

- 今迄に行われた3回の人工炭酸泉研究会では、臨床医学的応用として、
- (1) 糖尿病による下肢壊疽や褥瘡などの虚血性組織障害に対して、末梢循環機能の改善による自覚症状の軽快や治療効果.
 - (2) 慢性関節リウマチや腰痛症など、疼痛疾患の症状緩和やQOLの向上.
 - (3) 高血圧症に対する降圧作用や、脳卒中後遺症患者の機能改善などのリハビリ効果.
 - (4) 自律神経調節障害患者に対する効果や、糖尿病患者の末梢神経伝導速度の改善.
 - (5) 前立腺肥大症に対する高温度治療への応用.
 - (6) 慢性透析患者の足浴で、皮膚血行や病変の改善.
 - (7) スポーツや運動療法（リハビリ）後のクリーニングダウン効果.
 - (8) 天然炭酸泉・長湯温泉の臨床的效果.

などが発表され、またラットなどの動物実験や、生理的な炭酸泉の評価や効果も発表された.

前巻に掲載された中村昭先生の総説の文献にもものっている1944年（昭和19年）に南山堂から発行された、三澤敬義先生の「温泉療法」を改めて読むと、今後の炭酸泉研究や医学的応用について、示唆に富んだ記載があり、本号でも全文を紹介することとした. その中から特に興味深い記載を要約して巻頭言とさせて頂きたい.

まず1870～1880年頃にドイツのバード・ナウハイムで、温泉医が心臓病に対する効果を認めてから、炭酸泉が欧米で「心臓の湯」として愛用された歴史的な事実を述べている.

そして浴水中の体表皮膚毛細管の拡張で鮮紅色を呈すること、不感温度が32℃で、ヨーロッパでは30～34℃の浴温に対して、日本人が爽快に感ずるのは42～43℃で、低温の多い日本の炭酸泉があまり利用されなかったのは、入来先生が前巻頭言で指摘している入浴習慣の違いが推測される.

しかし33～34℃の低温でも爽快感があるのが炭酸泉の特徴で、温度が低いほど効果があり、高温度の炭酸泉のあつては炭酸ガスの逸散が著しいと述べている.

また天然の炭酸泉浴のみならず人工炭酸泉浴でも、その浴室内には炭酸ガスがうっ積しないように、浴室内の通風をよくしなければならないと警告している.

さらに炭酸泉浴の場合に、炭酸ガスが入浴者の皮膚を透過して吸収されることは周知の事実であるが、この炭酸ガスはまた温泉の含有する他の成分の皮膚透過性を著しく高めるもので、ヨーロッパでは例えばバーデン・バイ・ヴィーン、ヴィース・バーデンやブタペストなどの天然に遊離炭酸を殆ど含有していない温泉では、これに人工的に炭酸ガスを加えて、あたかも物理的療法におけると同様に、所謂・人工炭酸泉浴（炭酸泡沫浴）を行っていると述べ、我国における炭酸泉は、炭酸泉浴として治療上応用されていないと言っても過言ではなく、炭酸泉浴の施設とその医学的応用は、今後大いに改善を必要とする現状にあると、期待と希望を述べている.

適応症として、1) 心臓弁膜症、特に僧帽弁膜障害、2) 心筋炎、3) 心臓神経症、4) 神経症の沈うつ型、5) 脊髄癆、6) 貧血症、7) 陰萎症、8) 慢性婦人科疾患、特に月経障害、慢性子宮実質炎、9) 不妊症、10) 更年期障害.

禁忌症として、1) 心臓機能不全の状態にある心臓疾患には絶対的禁忌である、2) 神経症即ち神経衰弱症とヒステリー等の興奮型をあげている.

今後さらに天然や人工炭酸泉の全身や部分浴、飲泉などの施設を増し、その適応症を拡げて、炭酸泉の作用や効能が生理的、臨床的により深く解明されるように期待する.